

## 21

ボナール 『13、14、15世紀の服飾』画家、彫刻家の最も確かな遺物からの抜粋と歴史的・叙述的解説 全2巻。

**Bonnard, Camille. Costumes des XIII<sup>e</sup>, XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles, extraits des monuments les plus authentiques de peinture et de sculpture avec un texte historique et descriptif. 2vols. Paris, Treuttel et Würtz, 1829—1830. 200 plates (copper. hand-col.) 29.5×22.3 cm <383.13-B-1~2>**

Hiller p. 101    Colas 375-376    Lipp. 334

13, 14, 15世紀の芸術作品をもとにしたイタリア・ルネサンスの萌芽期から盛期までの服飾を示す図版200点とそれぞれ1~2頁の解説を集成した2巻本であり、イタリアで出版された『宗教服, 市民服, 武装』*Costumi ecclesiastici civili e militari*, 1827—1828の仏語版である。扱っている服飾の種類は宗教服8, 修道会の服装9, 宗教儀式10, 皇帝, 王, 王子, 王女19, 官吏22, 男子の市民服57, 女子の市民服41, 武装27, 馬上試合7, 時代別では11世紀が3, 13世紀が20, 14世紀が87, 15世紀が90となっている。これらの配列には特に規則が見られないため、種類ごとにまとめた巻末の目次を参考にする必要がある。

副題の「画家、彫刻家の最も確かな遺物からの抜粋」とは、本書で扱っている時代と同時代の芸術家たちの正しい作品を史料として描写したものであり、後代の偽作や贋作などによるものではないという意味で、著者の実証性に対する厳密さがうかがえる。史料にはミラノ、ヴェネチア、ロンバルディ、ローマ、シエナ、フィレンツェなど、主にイタリアの都市、地方の教会壁画、タブロー、細密画、彫像、写本などが含まれ、中にはフィリッポ・リッピ、マンテーニャ、デューラー、カラバッチオらの作品も見られる。

中世の間、過去の栄光の思い出のみを抱き続け、生気を失っていたイタリアの人々が、13世紀に入って突然新たな生命感を取り戻し、いわゆるルネサンスの開花へと進む時期の、単に服飾のみならず、宗教や生活全般に及ぶ慣習が、視覚と言葉の両面から生き生きと伝わってくる。

鮮やかな手彩色を施した図版はすべてポール・メルキュリ (Paul Mercuri) による。彼は著者の友人であり、あとがきによれば史料収集の旅にも同行している。ボナール自身も画家で1793年、フランスのトゥールーズに生まれ、1820年から7年間程、ローマやフィレンツェで活動した。(能沢)